

排除の体系としての性

— シュニッツラーとヴァイニンガーを中心に —

斎藤 昌人

(人文学部国際社会コミュニケーション学科)

Sexualität als Beseitigungssystem

— Arthur Schnitzlers „Andreas Thameyers letzter Brief“
und Otto Weiningers „Geschlecht und Charakter“ —

Masato SAITO

(Faculty of Humanities & Economics, Department of International Studies)

19世紀最後の年、シュニッツラー (Arthur Schnitzler) は、ひとりの男の「遺書」という形式をとったひとつの作品を書いている。『アンドレアス・ターマイアーの最後の手紙』(„Andreas Thameyers letzter Brief“)¹ と題されたこの作品は、いくつかの心理的解釈をのぞいて、あまり省みられることはなかった。それはひとつには、この作品の短さによるものであり、また、自殺を決意するにいたる主人公 Thameyer が、一見したところパラノイアという範疇に分類されるもので、心理的側面からのアプローチとしてはそれでこと足れりという面もあったからだろう。

しかし、ここに1903年に公にされた、そしてシュニッツラーの作品とは全く次元を異にするotto・ヴァイニンガー (Otto Weininger) の『性と性格』(„Geschlecht und Charakter“) を置いてみる。すると、この作品は、単にひとりの人間の心理を扱うという次元を越えていく。それは、この19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期に、何が問題にされていたのかを浮かび上がらせることにもなる。従ってここでの作業は、この時代の社会文化的文脈、とりわけ「性」という文脈を検証し、そのなかに、シュニッツラーの作品とヴァイニンガーの『性と性格』を位置づけることである。それはまた、「性」という次元を越えた、その時代の深層に降りていくことにもなる。

1

ニーケ・ヴァーグナー (Nike Wagner) は、19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期における性の言説の一側面を、「か弱い少女」と「妖女」という女性の二極化という観点からとらえている。もちろんそれは現実の女に対応したものではなく、男の側の見方を反映したものであり、どちらの女を描くにしても、その背後に共通しているのは、「性的存在」としての女への恐怖心である。つまり、「無垢な少女」へと「聖化」することによって女性は、「性的存在」としての側面を捨象され、また他方、「性的存在」としての女性の性に誘惑され、たとえそれに屈することがあるにせよ、それが「妖女」という存在のもつ非合理的、デモーニッシュな力に屈したものである限り、男は「性」に従属しているというその屈辱から逃れることができるというのである。²

ヴァーグナーが指摘しているとおり、この時代、男性の側から「女」が様々な形で描かれ、そして問題にされていたとするなら、その背景には、「男性とは何かという問い」が見え隠れしているのであり、³ そしてそれを問うことはそのまま、「男」が揺らぎ始めていることの証でもある。しか

もその多くは、まず「劣った性としての女」という面を強調するなかで、「男」を語る。

otto・ヴァイニンガーによる『性と性格』もそのような流れのなかに置くことができる。前年に提出された学位論文をもとに、翌1903年に出版されたこの「奇書」は、出版直後の著者の自殺という事情も相まって、その後1925年までに二十六版を重ねている。ヴァイニンガーはそこで「完全な典型的理想的男性」と「完全な典型的理想的女性」に対して、それぞれ「M」と「W」という言葉を用意し、個々の人間はその両者のあいだのどこかに配置されるとする。つまり、「男や女が存在するのではなく、ただ男性的なものと女性的なものが存在するだけだ」とする。⁴そして個人の性格は、個々人がそれぞれに持っている、「男性的要素」と「女性的要素」という二つの要素の比率によって決定されるというその主張の背後には、精神的なもの、能動的なもの、論理的なもの、あるいは天才的なものをつかさどるとされる「男性原理」が「女性原理」なるものによって崩壊の危機に瀕しているという危機感が見え隠れしている。そのもとでヴァイニンガーは、「女に関する分析のすべてがたどり着く、観察の結論、しかも最後の結論」として、「完全な女は自我を持たない」⁵とする。1912年に、カール・クラウスが「世界秩序は女性的なもののために脅かされている」⁶と言うとき、そこにはヴァイニンガーとの親近性を見て取ることができるし、M.W.ジョンストンがその『ウィーン精神』の中で、世紀転換期ウィーンの多岐にわたる精神世界を色分けするなかで、ヴァイニンガーを耽美主義の批判者としてとらえるとき、そのキーワードとなっているのもまた、その「耽美主義のもつ女性的要素」である。⁷

もちろん、このような捉え方そのものはこの時代に始まったことではなく、「自然」による「男」と「女」という二極への性のシステム化は、近代を通して一貫して進展し、近代ブルジョワイデオロギーのある意味で礎石ともなっている。⁸そこでは、理性と感情、文化と自然、そして能動性と受動性といった二元論的な捉え方そのものが、「男性的」と「女性的」という術語のもとで捉えられるのである。そして、ナポレオンによるプロイセンの占領、その後の対ナポレオン戦争と続く状況のなか、戦う男、戦士、英雄、死を恐れない姿が強調され、浸透していった「男らしさ」は、その後、国民国家形成、会社乱立時代、帝国主義と続いていく19世紀の流れのなかでさらに磨きをかけられ、男性には力強さと結びついた「男らしさ」が過剰に要求されるようになるのである。

しかし、19世紀後半になってくると、そのような「男」と「女」という二元論的イデオロギーは、現実の社会の実態とは齟齬を生じ始める。その背景には、19世紀後半から加速したりベラリズムの流れ、あるいはそのもとでの女性の権利拡大があるだろう。また、ブルジョワイデオロギーのもとタブーとされ、夫婦の寝室にのみ閉ざされていった「性」が、「科学」の対象となり、「性的存在」としての生身の人間、とりわけ「女」の姿があぶり出され、それによって逆に性的存在としての「男」が照らし出されてきたと言えるかもしれない。19世紀を通して徐々に社会に浸透し、強化されていった「男」と「女」というひとつのイデオロギー的構造が、ここにおいて綻びを示し始めている。それが、19世紀後半から20世紀にかけての性をめぐってのひとつの社会的状況であろう。そしてそれは、とりわけ男の側に突きつけられたものであり、その綻びを繕うのも男側の作業となってくるのである。ブルジョワ社会を支えていたかみえた性の二極化のシステムの危機を目の当たりにして、男たちは「不安から逃れる戦術」⁹をとるのである。つまり、「男」という観念から逃れるか、あるいは怯えた顔に頬被りし、その二極化のシステムを再度強化するのである。「女」という性をネガティブなものとして、せいぜいのところ男に都合の良い存在としての側面を強調し、それによってかろうじて「男」という性を肯定することによって、そのように、この時代、「女」が語られる背後では、「男」の自意識が、強迫観念のように男を追いつめている。とりわけそれは、「男」と「女」というイデオロギー的構造に関わるだけではなく、性的不能という形で、現実の関係をめぐってのものともなっている。さて、そのような文脈のなかに、ここで問題とする、1900年

に書かれたシュニッツラーの作品『Thameyer』はどのように位置づけることができるのだろうか。

2

Maja D. Reid は、この時代に書かれたシュニッツラーのいくつかの作品に共通するひとつの「テクニック」という観点から作品にアプローチをかける。つまり、「作品の主人公をひとつの観点なり、立場なりに固執させるが、それは作者自身のものとは全く相反するものであり、それによって、主人公の観点や立場の誤りが白日の下にさらけ出されていく」というものである。¹⁰ この作品に即していうなら、妻が「奇妙な肌の色をした」¹¹ 子供を産んだにもかかわらず、妻を信じ、妻が他の男と性的関係をもったという可能性をかたくなに否定し、そしてその「真実」を保証するために自殺を選ぶ Thameyer の、およそ合理的な思考では解釈し得ない狂気の姿にそれは示されているとしている。Reid 自身、意識はしていないが、この夫婦の間に「奇妙な肌の色」をした子供が産まれたとするなら、それは妻が夫以外の男性と性的行為をおこなったからに他ならないということをも前提としている。そして、その前提を補強するために様々な状況証拠を提出するが、そのうちのひとつは、主人公 Thameyer の性的不能である。Reid によれば、「妻との結婚を決意しながら、結婚に至るまで7年待った」こと、そしてその理由がはっきりとは語られていないということ、そして「結婚後4年経っても子供ができなかった」こと、すべてが Thameyer の性的不能の証拠となっているのである。¹² もちろん、当時の結婚は、ある程度経済力に左右されていたので、七年間結婚を引き延ばしたからと言って、必ずしも、それが男の性的不能を示すものではあるまい。

しかし、その問題は置いておき、とりあえず今はReidの流れを追ってみよう。Reidによれば、Thameyerは、「みずからの活力に不安を抱き続けていた」のであり、「夫として、そして愛する男としての不十分さをみずから感じ続けていた」¹³ のである。そして、彼にとって一番の不安は、妻が他の男性と関係を持ったかもしれないということではなく、自分に対して性的不能というレッテルを世間から貼られることなのである。¹⁴ Reidによれば、Thameyerの死の決意は、死をもって真実を伝え、妻の名誉、ひいては自己の名誉を守るかのように見えるが、実はそうではなく、みずからの性的不能を隠蔽するためのものだといっているのである。さらにReidは、シュニッツラーの作品の主人公の精神状況を範疇化した Weiss¹⁵ に依拠して、このThameyerをパラノイアに分類し、そのもとで世間に向けて書かれたThameyerの「真実を訴える手紙」の構造を検討し、その矛盾を指摘する。¹⁶ そして、その矛盾は、手紙の読み手の反応を綿密に考慮したうえで、巧妙に作り上げられたものであり、そのように狂気を装ってまで意図したものは、自分の性的不能を覆い隠すことだといっているのである。「性的不能と見なされる苦痛に比べたら」、狂気にとらわれていると見なされることなど、いかほどの苦痛でもないといっているのであり、そこからのがれるためなら、「死もけっして高い代償ではない」といっているのである。¹⁷

性的不能がここまで男を追いつめていくとするなら、それは「男らしさ」という規範が、強力なものとして機能していたことを示している。作品が書かれたこの時代、先に見たように「男らしさ」に対する要求は、無意識のうちにであれ、あるいは逆に無意識のうちにすり込まれたものであるだけに、いっそう強固なものとなり、そのもとでこの時代、さらに「力強さ」が強調されている。¹⁸ 19世紀後半には、女性の性欲と男性の性的不能に関する学問的・科学的文献が増えつつあり、当初その多くは女性の性欲を否定することで、性をめぐっての規範に女性を取り込んでいたが、徐々に女性にも性欲があるということを認める見解が生じつつあると指摘されている。そのように、女性にも性欲が認められ、性に対して従来の受動的態度のみに縛られているわけではない女性があらわれるとともに、それは男性の側からはある種脅威の対象となったのである。女にも性欲があるとさ

れたとき、それにいかに対応するか、その問題が男性に突きつけられてくるのである。これは、性の場面を含め、すべてのことにおいて、女という存在は、能動的に働きかけることなく、ただ受動的にふるまうだけと思いきや、こゝで来た男にとっては衝撃的な出来事である。男性の側からの対応は、暴力的なものから道徳に訴えるものまで様々なものが見られるが、そのうちのひとつの現われが性的不能なのである。¹⁹ この世紀転換期に男性の性的不能が問題にされたとするなら、そこには、そのように「男らしさ」の崩壊の危機に対する対抗手段として、その規範がいつそう強化されていこうとする状況が存在しているのである。

しかし、この作品をそのような性的不能をめぐってのコンテクストのみに置くことはできない。先に触れたように、性的不能をめぐっての議論はひとつのことを前提として出発している。妻が「奇妙な肌の色」の子供を産んだとするなら、それは自分の子供ではなく、父親は他人だという問題である。確かに、我々現代の読み手からすれば、もっとも、そのような判断を下すことにそもそも何らかの意味があるとすればの話であるが、この子供の父親は別人だと断言するだろう。そして、この作品が書かれた時代の反応はどうだろうか。それは作品そのものから窺い知ることができる。つまり、作品の構造が、この Thameyer の手紙を読む読み手の反応を前提としているからである。そして、その手紙の中で Thameyer は、世間の人間一般は、この子の父親は別人であると判断し、妻は墮落した女というレッテルを貼られ、そして自分は物笑いの種になる、と繰り返し語る。つまり、当時においても、この主人公に対する見方は、現代のそれと格段かけ離れたものではないということが推測できるのである。だがそのあたりの事情をもう少し詳しく検討してみよう。

3

1900年に書かれたシュニッツラーのこの作品は、前年の1899年に出版された一冊の本²⁰によって、その土台部分が形成されている。²¹ Thameyer の語る言葉の多くは、その書物に基づいているのだが、そこでは、妊娠時期の母親の行為、あるいは母親が受けた影響と産まれてくる子供との間の関連性が取り上げられている。そして、生まれてきた子供の父親が自分であるということを証明するにあたって、そのような話を引き合いに出す Thameyer は、「科学的に確認された信じるに値する事実」²² というふうにそれらの話と呼んでいるのである。もちろん、そこで描かれているのは過去の事例の範疇を出るものではなく、「科学」の時代と言われる当時においては、単なる「迷信」の域を超えるものではないかもしれない。しかし、この時代、そのような本が書かれ、そしてシュニッツラーがそれを作品の中に移植したとするなら、その背景はやはり探ってみなければならない。

その前に、ここで、産まれてきた子供が自分の子供であることを示すために Thameyer がしきりに語る「Versehen」という用語に触れておこう。1975年版のブロックハウスによれば、「妊娠中の女性が何かに versehen するとは、その目にしたものに驚愕し、そこから影響を受けることによって、産まれてくる子供の姿が好ましからざるものになること」と説明され、「迷信」と定義されている。²³ さらに1968年版のブロックハウスでも、同じような説明がなされ、「昔はそうだと推測されていた」と明言こそ避けているが、あくまで迷信の範疇でとらえられている。²⁴ さらにさかのぼって、この作品が書かれた時代の辞書では「妊娠中の女性があるものに versehen するとは、邪悪な影響によって害を被ることであり、その影響は、民間信仰によれば、不快なものを見ることによって胎児に及ぼされるものである」とされ、「民間信仰」ととらえられている。²⁵ また、「迷信辞典」には「妊娠」に関する多くの「迷信」が記載されている。そこでは、妊婦が妊娠中にとった行動、あるいは受けた印象が、いかに胎児に大きな、ときには悪影響を及ぼすと言われ続けてきたかに関して、多くの事例が掲載されている。そして、そのなかで、この作品のキーワードとなっている

「Versehen」に関しての記述もあり、そこでは「Versehen」は、大きな危険、そして胎児に多くの害をもたらす原因と見なされていると記述されている。²⁶ もちろん、その背景には、妊婦をできる限りストレスから遠ざけておこうとする「医学者」サイドからの啓蒙的意図も伺えるが、いずれにせよ、ここでは民間療法と迷信が完全に分ちがたく結びついているとされているのである。

このように、Thameyerが妻の語る真実の保証としてしきりに引き合いに出す「Versehen」は、すでに「迷信」の類として捉えられている。ある言葉なりが辞書に定着するには、一般の認識がある程度広まってからのことである。つまり、この時代、「Versehen」は「迷信」として既に認知されていたのである。だからこそ、Thameyerの言葉は、いっそう嘲笑を誘うだけなのである。確かにReidの言うとおり、Thameyerはそのあたりの事情を十分承知し、巧みに計算した上で、みずからの性的不能を隠蔽するために狂気を装っていると言えるかもしれない。しかし、ことはそれほど単純だろうか。

19世紀、とりわけその後半の50年で、「Versehen」という概念が迷信として否定的に捉えられる一方で、何が胎児に悪影響を与えるかをめぐって、胎児とその母親とのつながりはしきりに取りざたされている。性が科学の対象として研究され、性に関しては語らないという、従来の厳格な性道徳が綻びを示し始めるにつれ、逆に科学とは無縁な性の情報や、さらには「科学」に名を借りた性の情報が氾濫し始める。後天的に獲得されたものが、生まれてくる子供に影響を与えるという説は19世紀を通して支配的だったが、それが修正され、両親の生活や習慣と遺伝的なものに直接の関係はないという説が一般的に認められるようになったのは、ようやく19世紀も末になってからである。確かに人々は、19世紀自然科学の時代を経ることによって、「科学」と「迷信」の境界を意識し始めるようになったのである。

しかし、ここで再びヴァイニンガーに耳を傾けてみよう。ヴァイニンガーは、「母との性交なしでも、生まれてくる子供に影響を与えるものが存在する可能性がある」としたうえで、「一人の女性にとっても大きな影響を与え、その精液から育っていったわけでもないのに、彼女の産む子供が自分と似ている、そのような男がいるとすれば、彼こそ、彼女と性的に完全に補完しあっているのである」としている。²⁷ もちろん、ここでのヴァイニンガーの主眼は、産まれてくる子供は、母親がそれまで性交の対象とした男性の影響を受けるものだということではなく、あくまで彼が『性と性格』のキーとし、そして理想とした、完璧な男と完璧な女、並びにその関係のありようを問題としているのである。ただし、ここでヴァイニンガーが問題にしている「Versehen」は、以下の文脈から続くものである。

生物学と医学、培養学や婦人科学は、(.....) Ch.ダーヴィンの影響のもと、六十年以上にわたって、「Versehen」あるいは「Verschauen」という問題に対し、ほぼ完全に否定的に扱っていた。²⁸

そのもとで、ヴァイニンガーは、「科学は、それ（「Versehen」）をまったくもってあり得ないものと退けるのではなく、その説明をなそうと努力すべきだ」と語る。²⁹ 1859年、『種の起源』の衝撃の余波は、ほぼ40年たったのちにも、ヴァイニンガーのような人物をとらえている。『種の起源』を契機として生まれた進化論は、1870年代頃までにはアカデミズムの世界では受容されていく。もっとも、それは創造者としての神の存在というキリスト教的世界観を根底から崩壊させる危険をはらむものであった。たとえそれが意図的ではなかったにしろ、従来の世界観は科学によって否定された。19世紀後半には、それに代わる足場の構築が求められ、多くの知識人は、従来の世界観を崩壊させた科学を新たな足場として確保しようとした。世界に関するすべてのことを「科学的に」解釈

しようとするこの新たな流れは、社会ダーヴィニズム生み出すものでもあった。³⁰ もちろん、社会ダーヴィニズムそのものは「科学的」なものであるかもしれないが、人間社会をもダーヴィンの原理で解釈しようとするその試みは、ある意味従来の迷妄を「科学」という新たな衣裳で補強するという素地を作り上げたのも事実である。

ヴァイニンガーが次のように語る時、「科学」のもとに何が語られているかが示されている。

一度黒人とのあいだで子供を産んだ白人の女は、その後、誤解の余地のない黒人種の特徴を帯びた子供を、白人の男とのあいだで産むということがおうおうにしてある。³¹

ここで語られていることが、ひとりヴァイニンガーという「鬼才」の頭のなかで構築された妄想によるものだと、必ずしも片づけられない。1900年頃においても、なおヴァイニンガーの言葉に見られるような「Telegonie」(「先夫遺伝、感応遺伝」)という概念は、広く自然史の教科書や百科事典の対象とされていたのである。³² だとするなら、これはいったんは否定されたかに見えた迷信や民間信仰が、科学と結びつくことによって形を変え、再度登場してきたとも言えるのである。

4

ここでいったんシュニッツラーの作品に戻ろう。Reidは『Thamayer』を論じるにあたって「Versehen」という視点を欠いている。さらにもう一つ見落としていることがある。このThamayerの遺書の読み手は、生まれてきた子供の父親として、「黒人」を思い浮かべるという点である。現実の社会の姿を写し出すとされるシュニッツラーの作風を考えたとき、それは単に作品のなかで想定された手紙の読み手という枠を越え、何らかの形でその時代の風景を背景としている。過去における「Versehen」の例としては、聖者像を見つめることによって、生まれてくる子はその聖者に似るといふものがあげられている。さらに、「迷信事典」によれば、妊婦はギリシアの像や聖者像、あるいは天使像を見つめるのが生まれてくる子には良いとする事例も紹介されている。³³

それを踏まえたとき、作品の子供は、なぜ「奇妙な肌の色」でなければいけないのだろう。そして、その理由としてなぜ妊娠時期に目にした現実の黒人の姿におびえていたという「Versehen」を持ち出しているのだろうか。もちろん、このような質問そのものに意味はない。意味があるとするなら、『Thamayer』に見られるように、シュニッツラーが1900年に書いた作品のなかで、黒人と結びつけた形で「Versehen」を描き、そして1903年にヴァイニンガーが、「男」と「女」の性を論じる書物のなかで、「感応遺伝」の説明に「黒人」を持ち出したことである。それは、「黒人」というイメージ、あるいは「黒人」に対する否定的イメージが一般レベルですでに定着していたことを示すものであろう。もちろん、それは何もこの時代に始まったことではない。すでに18世紀から「黒人」に対する偏見は形成されつつあり、とりわけ性をめぐっての言説の中では、黒人には「性欲過多」というイメージが投影されるのである。

一方、『種の起源』の登場とともに、従来の価値観が崩れ始め、それに変わって「科学主義」が登場してきたこと。そのもとで、性が科学の対象とされることによって、逆に科学の枠外でも、性が語られ始めたこと。そしてそのなかで、この時代、様々な次元で性的なことを遠ざけようとする試みがなされたとするなら、それは性に対する従来の規範が、規範としての力と機能をもはや失いつつあることの裏返しであろう。その流れの中で見た場合、ブルジョワイデオロギーの中で非難の対象とされていた性欲過多というイメージが、黒人へと投影されたことから、性を遠ざけようとする戒めが、人種論と相乗りした形で相互に補強され強化されたものとして登場してきたという流

れを見て取ることができる。シュニッツラーやヴァイニングガーが性や生殖を黒人と結びつけるとするならば、そこにはそのような社会的背景があったと言えるだろう。

それは、さらに大きな社会的コンテクストの中でとらえることもできる。つまり、『種の起源』、あるいは科学主義の落とし子とも言える社会ダーヴィニズムの文脈である。¹⁾ それに関して詳しく論じることは、今は手に余ることであるが、社会ダーヴィニズムの礎となっているのは、いうまでもなく優劣の思想である。社会改良という旗印の下、「劣った」ものは排除され、社会の中の様々な場面で、線引きがおこなわれる。そこでは犯罪者、精神異常者、同性愛者などといった特定の性行をもったものだけが排除されるのではなく、下層階級一般もターゲットにされている。社会ダーヴィニズムが展開されていった時代は、工業化、近代化のなかで「大衆」という存在が登場し、やがて社会のなかでひとつの勢力を築き始める時代でもある。それを踏まえたとき、下層階級ほど子供の数が多く、ひいては、いずれ将来的には犯罪者や頭脳の劣ったものばかりで社会は占領されていくというその論調からは、社会改革という謳い文句の背後に、実は、大衆の影に怯えるブルジョワジーの権力維持の装置が隠されていることを示していると言えるだろう。

優劣を分ける線は、その時々状況に応じて引き直され、「劣った」存在が作り出されてきた。「劣った性」としての「女」が、「劣った階級」としての「労働者階級」、「大衆」が作り出され、それによって市民階級は「優れた」存在としてみずからの「優越性」を強調する。そして、みずからの没落が予感され、大衆の力がもはや無視し得ないものになり、階級間の差異が以前ほど明確なものでなくなったとき、つまり、階級間での明確な線引きにかけりが見え始めたとき、「排除」されるべき存在が、スケープゴートのように用意されるのである。そして19世紀後半の文脈で見たとき、「科学」がその線引きに正当性を与えている。性が科学の対象となることによって、「異常」と「正常」が峻別される。以前は寛容に扱われていた同性愛が厳しく排除されるようになったのは、その一例であろう。そして「人種」が科学的に検証されることによって、「劣った人種」が定義される。シュニッツラーやヴァイニングガーに見られるように、性、あるいは生殖の場面で「黒人」が語られるとするならば、それはその時代の中で、「排除」の機構が強化されていったことを示すものであると同時に、不安という土壌を利用することによって、「科学」がいかに民間信仰や迷信の変種を作り上げていったかを示すものともなっている。

それらを踏まえたとき、劣った存在として、「女」と「黒人」と「ユダヤ人」を結びつけたヴァイニングガーの『性と性格』は、その時代を深いところで映し出すひとつの鏡ともなっている。それと同時に、ブルジョア社会から脱落しつつあった小市民の Thameyer に、『Versehen』を語らせるシュニッツラーのこの作品も、その時代の影を帯びている。子どもがいらないということ、妻が他の男性と性的関係をもったということ、そして他人の子を産んだということ、しかもその子どもは「奇妙な肌の色」をしているということ、そして迷信として退けられる『Versehen』を援用して、それでも妻を信じる自分は狂気に陥ったと見なされること。そのように排除の網の目は幾重にも張り巡らされている。Thameyer の自殺は、そこにいったん絡みとられてしまったならば、もはや逃れることなど到底不可能なほど、排除のシステムが様々な次元に用意され、強化されていることを示すものであろう。

1 Arthur Schnitzler: *Andreas Thameyers letzter Brief* in: *Gesammelte Werke. Erzählenden Schriften Erster Band*. Frankfurt am Main, 1981. 以下、本文中で作品そのものを取り上げるときは、【Thameyer】と略す。

2 Nike Wagner: *Geist und Geschlecht. Karl Kraus und die Erotik der Wiener Moderne*

- Frankfurt am Main, 1982. S.138, 149
- 3 ebd., S. 150
 - 4 Otto Weininger: *Geschlecht und Charakter* Wien/Leipzig, 1905, S. 10
 - 5 ebd., S. 240
 - 6 Karl Kraus : *August Strindberg* in : *Die Fackel* Nr.351/352/353. Wien, 912. S. 3
 - 7 W. M. ジョンストン (井上修一他訳) : 『ウィーン精神』 (みすず書房, 1986年) 242頁
 - 8 以下, 「男」と「女」の二元論, そのもとでの「男らしさ」の記述に関しては, たとえばトーマス・キューネ編 (星乃治彦訳) : 『男の歴史』 (柏書房, 1997年), とりわけキューネ : 『性の歴史としての男性史』 (同所収), カーレン・ハーゲマン『愛国的な戦う男らしさ』 (同所収), さらにジョージ・L・モッセ (佐藤卓己他訳) : 『ナショナリズムとセクシュアリティ』 (柏書房, 1996年), スティーブン・カーン (喜多迅鷹他訳) : 『肉体の文化史』 (法政大学出版局, 1989年) 等を参考にした.
 - 9 Wagner, S. 149
 - 10 Maja D. Reid : „*Andreas Thameyers letzter Brief*“ and „*Der letzte Brief eines Literaten*“
Two neglected Schnitzler Stories in : *German Quarterly* 42, 1972, S. 444
 - 11 [Thameyer], S. 517
 - 12 Reid, S. 449
 - 13 ebd.
 - 14 ebd.
 - 15 Robert O. Weiss : *The Psychoses in the works of Arthur Schinitzler* in : *German Quarterly* 41, 1968, S. 388-389
 - 16 Reid, S. 446
 - 17 Reid, S. 449
 - 18 「男らしさ」の強調という点に関しては, たとえば, カーン, 132-133頁, あるいはモッセ, 35-62頁あたりを参照.
 - 19 カーン, 123-132頁参照
 - 20 Gerhard von Welsenburg : *Das Versehen der Frauen in Vergangenheit und Gegenwart und die Anschauung der Ärzte, Naturforscher und Philosophen darüber* Leipzig, 1899
 - 21 Vgl., Reinhard Urbach : *Schnitzler Kommentar zu den erzählenden Schriften und dramatischen Werken* München, 1974, S. 111
 - 22 S. 515
 - 23 *Der neue Blockhaus*, fünfte, völlig neubearbeitete Auflage Wiesbaden, 1975, S. 414
 - 24 *Der neue Blockhaus*, vierte, neubearbeitete Auflage Wiesbaden, 1968, S. 392
 - 25 *Deutsche Wörterbuch*, von Hermann Paul, zweite vermehrte Auflage, 1908, S. 610
 - 26 *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens* Hrsg. von unter besonderer Mitwirkung von E. Hoffmann-Krayer und Mitarbeit zahlreicher Fachgenossen von Hans Bachthold-Staubli, Berlin und Leipzig, 1935/1936, Band VII, S. 1422
 - 27 Weininger, S. 286
 - 28 Weininger, S. 285
 - 29 ebd.
 - 30 このあたりの記述に関しては, たとえば米本昌平『遺伝管理社会』 (弘文堂, 1989年) 42-45頁を参照
 - 31 Weininger, S. 307
 - 32 レオン・ポリアコフ (アーリア主義研究会訳) : 『アーリア神話 ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』 (法政大学出版局, 1985年) 376頁
 - 33 *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens* S. 1422
 - 34 多岐にわたる優生学の流れのなか, 次のふたつの象徴的な出来事を, シュニッツラーやヴァイニンガーの時代的・社会的背景との関連で挙げておいてもいいだろう. つまり, ドイツ優生学の祖と言われる A. Ploetz の „Grundlinien einer Rassen-Hygiene“ の出版が1895年, さらに, その後のドイツ優生学を推進させる契機ともなった, 大資本家クルップによるコンクールが1900年に催されている. ちなみにそのコ

ンクールのテーマは、「祖国の利益および科学の発展のために」、「内政の発展及び国の立法に関して進化論から何を学ぶか」というものである。なお、このコンクールに関しては、米本、64頁以下、ポリアコフ、392頁以下を参考にした。

平成12年（2000）9月30日受理

平成12年（2000）12月25日発行

